

# 育児期の母親が「子育てにテレビが必要」と感じるとき

～メディアと子育て（2）～

神谷哲司・小笠原拓・柿内真紀・高口明久  
植木綾子・広重佳治・小林勝年・寺川志奈子  
塩野谷斉・小枝達也・田丸敏高

When Do Mothers Need Television for Child-Rearing?

KAMIYA Tetuji, OGASAWARA Taku, KAKIUCHI Maki, TAKAGUCHI Akihisa,  
UEKI Ayako, HIROSHIGE Yoshiharu, KOBAYASHI Katsutoshi, TERAKAWA Shinako,  
SHIONOYA Hitoshi, KOEDA Tatsuya, and TAMARU Toshitaka

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第4巻第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.4 / No.2

平成19年11月30日発行 November 30, 2007

# 育児期の母親が「子育てにテレビが必要」と感じるとき

～メディアと子育て（2）～

神谷哲司\* 小笠原拓\* 柿内真紀\*\* 高口明久\* 植木綾子\*\*\* 広重佳治\*  
小林勝年\*\* 寺川志奈子\* 塩野谷斉\* 小枝達也\* 田丸敏高\*

When Do Mothers Need Television for Child-Rearing?

KAMIYA Tetuji, OGASAWARA Taku, KAKIUCHI Maki, TAKAGUCHI Akihisa,  
UEKI Ayako, HIROSHIGE Yoshiharu, KOBAYASHI Katsutoshi, TERAKAWA Shinako,  
SHIONOYA Hitoshi, KOEDA Tatsuya, and TAMARU Toshitaka

キーワード：母親，テレビ，メディア，子育て

Key words : mothers, television, mass-media, child-rearing

## 【問題と目的】

テレビは、その登場時から幾度となく子どもの発達への功罪が問われてきている。時には、「テレビばかり見ていると頭が悪くなる」といった言葉で表されたように、子どもの発達に悪い影響を与えるものとして、また時には、お茶の間に居ながらにして世界各国の情報を手に入れることのできる便利な道具として、である。そんな中、特に昨今では低年齢児のテレビ視聴の問題が取りざたされるようになってきている。

それら低年齢児のテレビ視聴に関連する研究では、そのほとんどがテレビなどのメディア接触・利用と子どもの発達や心身の状態などとの直接的な関係について取り上げており、子どもの生活の環境としてメディアを位置づけているものは少ない。しかし、一色（2006）に見られるように、テレビ・ビデオの視聴時間には、子ども自身の協調性・共感性や友達関係、子どもの絵本読みや外遊びなどの生活機能のみならず、保護者のメディア観や監督機能、保護者の子どもへの信頼感といった要因が関連しており、特に低年齢児については、子どもが自発的にテレビなどを視聴するという側面よりも、保護者がテレビをどのように活用しているかが大きくかかわっているものと考えられる。すなわち、子どもの育ちやそれを取りまく子育て環境において、メディアがどのように位置づけられ、生活の中に組み込まれているのか、さらに言えば、母親を中心とした保護者がメディアそのものをどのようにとらえ、子育て環境を構成しているのかについて検討することが必要であると考えられるのである。

そうした観点を踏まえ、鳥取県内の3歳児、1歳6ヶ月児の保護者を対象とした調査を報告した

---

\* 鳥取大学地域学部地域教育学科

\*\* 鳥取大学生涯教育総合センター

\*\*\* 鳥取短期大学幼児教育保育学科

前報(植木ほか, 2007)では、「密室育児」といわれるように、子育ての担い手が少なく、極めてストレスフルである現代の育児環境において、少ない子育て資源のひとつとして、テレビを初めとしたメディアが、子育てに活用されていることが示されていた。また、「子育てにテレビは必要か」という問いに対しては、全体で見ると意見が二分されていた。

そこで、本報告では、この「子育てにテレビが必要である」という意識(以下、「テレビ必要意識」)をめぐって、保護者の置かれている子育て環境について検討してみたい。まず、子どものテレビ視聴に関しては、保護者のテレビ必要意識が高いほど、その子どものテレビ視聴時間が長いことが予想される。また、1歳児におけるテレビの視聴時間は子どもの発達状況と関連があること(菅原, 2005)、1歳6ヵ月児、3歳児の発達状況は、保護者の「子育ての楽しさ」と関連することが示されていること(江原ほか, 2003; 小枝ほか, 2003)が明らかになっている。そこで、まず、テレビ必要意識と相互に関連する要因として、「保護者の子育ての楽しさ」「子どものテレビ視聴時間」「子どもの発達状況」について取り上げ、それらと相互の関連性を検討することを第1の目的とする。

次に、テレビ必要意識を形成する子育てや家族の状況について検討するため、本調査の中から関連すると思われる、「家族形態」「きょうだいの有無」「昼間の保育者」を取り上げることとする。「家族形態」は、昼間子どもとかわることができる大人が多いと考えられる拡大家族と核家族の2水準を取り上げる。また、「きょうだいの有無」については、年長の子どもがいる場合には、子ども同士で遊んだり、より年長の子どもの場合には3歳児、1歳6ヵ月児の面倒を見ることもできると考えられるため、単純にきょうだいがあるかどうかだけではなく、「年上のきょうだいの有無」についても検討することとする。また、「昼間の保育者」については、就業している母親よりも一日中子どもとかわっている母親の方が子育てによるストレスが高いことから(牧野, 1983)、一日中子どもとかわることが、よりテレビの必要性を高める可能性があると考えられるため、「昼間保育者」は「母親」と「保育者」の2水準のみ比較することとする。

さらに、本調査では、メディアが子育ての中でどのように位置づけられているかという観点から、「朝目覚めが悪いとき」「なかなか泣き止まないとき」といった日常的な育児場面を設定し、それらの場面において用いられるメディアについて調べていた(植木ほか, 2007)。そこで、テレビやビデオを選び、それらを日常的に活用している保護者は、よりテレビが必要であると認識しているものと思われる。そこで、これら育児場面においてテレビやビデオが活用されることがテレビ必要意識と関連しているかどうかについても明らかにしたい。

以上より、本稿の目的は次の3つの関連を明らかにすることとしてまとめられる。

目的1: 「テレビ必要意識」と「保護者の子育ての楽しさ」「子どものテレビ視聴時間」「子どもの発達状況」との関連

目的2: 「テレビ必要意識」と「核家族か拡大家族か」「きょうだいの有無」「昼間保育者」との関連

目的3: 「テレビ必要意識」と日常的な育児場面におけるテレビ・ビデオの利用の有無との関連

## 【方法】

### 調査時期

2005年8月下旬～9月

### 調査協力者

鳥取県内の1歳6ヶ月児・3歳児をもつ保護者。県内を東部、中部、西部に分割し、それぞれ市部と郡部に分けることで6ブロックを対象とした。さらに、県内の2005年の1歳6ヶ月健診、3歳児健診対象者数を基に、各ブロックごとの健診対象者数の比率を求めて、県全体で調査対象者数が300名程度になるよう、ブロックごとの調査対象者数を設定し、調査対象となる市町村を決定した。対象となったのは、3市9町（なお、行政単位は2004年9月のものを採用したため、調査時点での対象は3市8町）。各保健所に郵送を依頼した数は3歳児381通、1歳6ヶ月児365通。最終回収数は3歳児311通（回収率81.6%）、1歳6ヶ月児300通（回収率82.2%）。なお、有効回答者のうち3歳児は98.4%、1歳6ヶ月児は99.0%が母親による回答であった。そこで、以下「保護者」ではなく文脈によって「母親」と記述することもある。

### 調査手続き

本研究グループにより作成された質問紙は、鳥取市の3歳児健診の会場において快諾を得られた保護者を対象にパイロットテストを試みると同時に、回答のしやすさ、全体の見やすさなどについての感想を得た。この過程を通して選択項目やワーディングなどを修正後、本調査を実施した。本調査は、対象となった市町の保健所の協力を得て、事前にアンケートを家庭に送付して記入を依頼し、健診会場で回収した。

### 調査内容

本調査においては、子どもの生活環境におけるメディア、特にテレビを主眼とし、子どもの生活におけるメディアの活用状況（セクションⅠ）、保護者の子育て状況や情報通信機器の利用状況（セクションⅡ）、基本情報（セクションⅢ）をたずねていた。また、子どもの発達状況や保護者の意識などをあわせて検討するため、各健診で提出された問診票のデータを、同意が得られた協力者のみ別途転記し、分析に用いていた（2市1町においては、問診票と同様の質問を記載した質問紙調査票を作成し、直接尋ねた）。本報で用いる項目は以下のとおり。詳細な項目については、植木ほか（2007）を参照のこと。なお、各健診で提出された問診票のデータを転用することに関する倫理性については本学部の倫理委員会にて承認を得ている。

#### テレビ必要意識

「子育てにテレビが必要と思うか」について、「まったくそう思う（1）」「ややそう思う（2）」「あまりそう思わない（3）」「まったくそう思わない（4）」の4件法で回答を得た。

#### 子どものテレビ視聴時間

子どものテレビ視聴時間については、昼間と夕食後に分けて尋ねていたことから、これらのクロス表を作成した後、1日のテレビ視聴時間を「2時間以内」「2～4時間程度」「3時間以上」の3水準にグループ化し指標として用いることとした。

#### 子どもの発達状況

先述のように、本調査においては、健診の場を借りてデータが回収されたとともに、了承が得られた調査協力者からは、健診の問診票のデータを借用している。子どもの発達状況に関するデータ

は、この健診問診票より転記した、子どもの発達に関する質問項目、3歳児12項目、1歳6ヵ月児14項目を用いることとした。具体的な項目は、3歳児では「片足で2～3秒立てますか」「ぼく、私を使いますか」、1歳6ヵ月時では「食事をスプーンなどで食べたがりますか」「『○○ちゃんのお耳はどれ?』などと尋ねて、耳、目、口を指示しますか?」などである。これらの項目のうち、子どもの発達状況については、各年齢児の健診問診票より、1歳6ヵ月児14項目、3歳児12項目のうち「いいえ」に該当するものをカウントして、「0～1個」「2～3個」「4個以上」の3水準にカテゴリ化した。

#### 保護者の子育ての楽しさ

同様に健診の問診票より転記された。「楽しい (1)」「ときどき楽しくない (2)」「あまり楽しくない (3)」の3件法である。

### 【結果】

#### <テレビ必要意識と子育て状況>

まず、テレビ必要意識と、子どものテレビ視聴時間、子どもの発達状況、保護者の子育ての楽しさとの関連について検討する。

保護者のテレビ必要意識と、その子どものテレビ視聴時間との関連について順位相関係数( Kendallのタウ (b) )。以下同じ)を算出したところ、3歳児で $r=-.27$  ( $p<.001$ )、1歳6ヵ月児で $r=-.32$  ( $p<.001$ )の値が得られた(図1, 2)。このことから、テレビ必要意識の高い保護者の家庭では、子どもはより長い時間テレビを見ていると認識されていることがわかる。

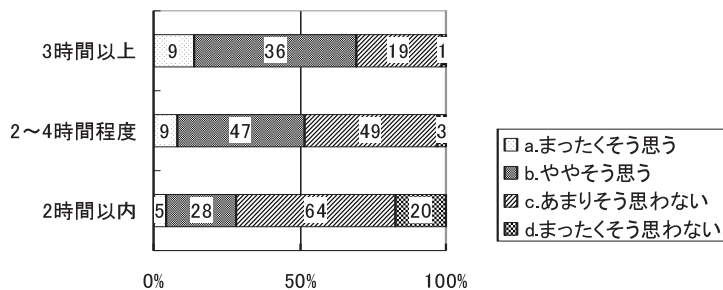


図1 テレビ視聴時間とテレビ必要意識(3歳児)

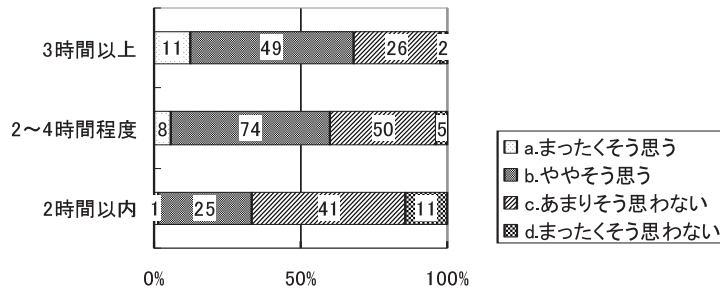


図2 テレビ視聴時間とテレビ必要意識(1歳6ヵ月児)

次に、テレビの視聴時間と子どもの発達状況との関連を示したものが図3、4である。それぞれの順位相関係数は、3歳児で $r=-.03$  (n.s.)、1歳6ヵ月児で $r=.23$  ( $p<.001$ )で、1歳6ヵ月児のみ統計的に有意であった。すなわち、1歳6ヵ月児ではテレビ視聴時間が長いほど、子どもの発達にかかる健診項目で「いいえ」と回答する傾向があることが示されている。

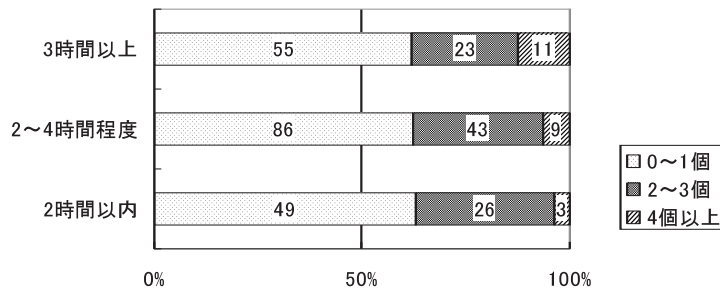


図3 テレビ視聴時間と子どもの発達(3歳児)

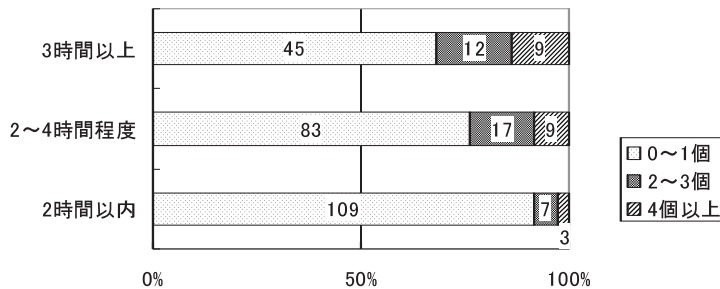


図4 テレビ視聴時間と子どもの発達(1歳6ヵ月児)

さらに、1歳6ヵ月児の発達14項目それぞれについて、昼間、夕食後のテレビ視聴時間との関連を検討したところ、昼間のテレビ視聴時間とことばの発達にかかわる項目(項目番号12, 13, 14)との間に有意な関連があることが示された(発達項目の「はい」を1, 「いいえ」を0とする順位

相関係数；順に $r=-.18$   $p<.01$ ,  $r=-.15$   $p<.05$ ,  $r=-.14$   $p<.05$ 。

次に、「子育ての楽しさ」と「子どものテレビ視聴時間」との関連を検討したところ、順位相関係数は1歳6ヵ月児で、 $r=-.23$   $p<.001$ , 3歳児で $r=-.13$   $p<.05$ であった(図5, 6)。

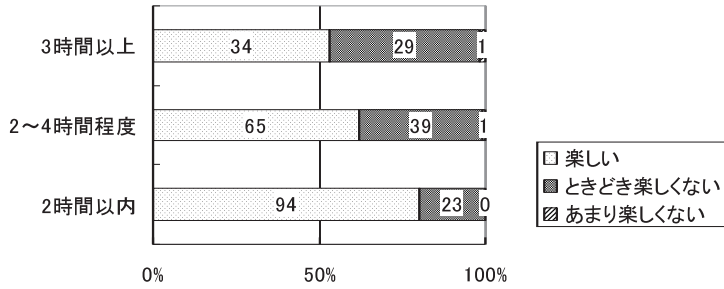


図5 テレビの視聴時間と子育ての楽しさ(3歳児)

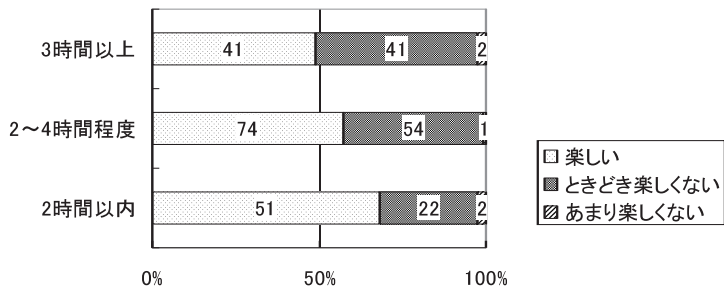


図6 テレビの視聴時間と子育ての楽しさ(1歳6ヵ月児)

そして、次に子育ての楽しさとテレビ必要意識との関連について検討したところ、3歳児で $r=-.19$   $p<.01$ , 1歳6ヵ月児で、 $r=-.10$   $p<.10$ であった(図7, 8)。

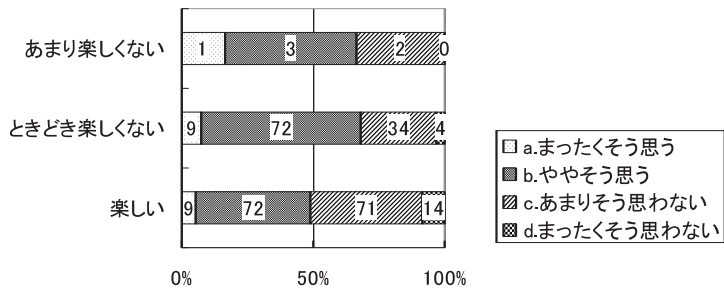


図7 テレビ必要意識と子育ての楽しさ(3歳児)



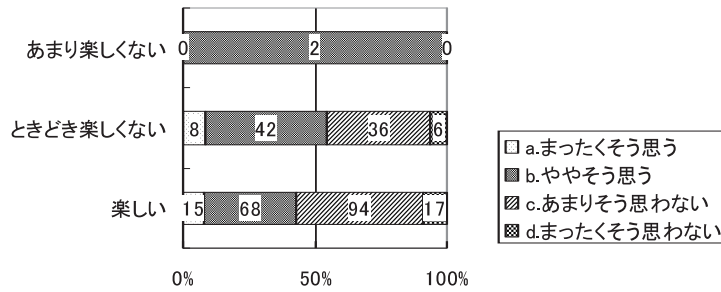


図8 テレビ必要意識と子育ての楽しさ(1歳6ヵ月児)

また、テレビ必要意識と子どもの発達状況との関連では、3歳児で $r=-.00$  n.s., 1歳6ヵ月児で、 $r=-.13$   $p<.05$ であった(図9, 10)。

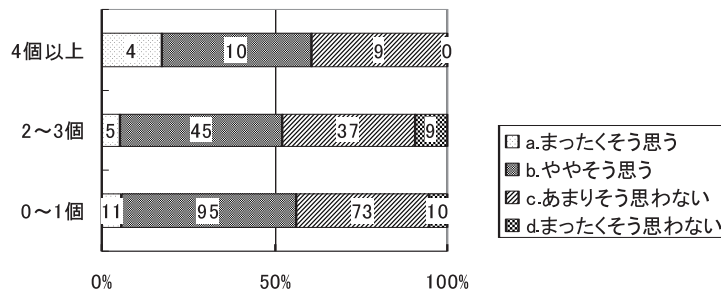


図9 テレビ必要意識と子どもの発達(3歳児)

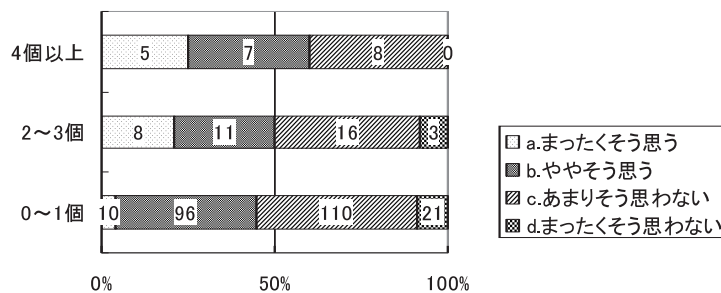


図10 テレビ必要意識と子どもの発達(1歳6ヵ月児)

### <テレビ必要意識と家庭の状況>

次に、テレビ必要意識と子育て・家族の状況との関連を検討する。子育て・家族の状況として、今回は、「家族形態」と「きょうだいの有無」「昼間の保育者」を取り上げ、それぞれのテレビ必要意識の得点を比較してみた。t検定の結果を、表1, 2に示す。



表1 子育て・家族の状況とテレビ必要意識(3歳児)

		N	Mean	SD	t 値	df
家族形態	核家族	180	2.46	0.68	1.18	271
	拡大家族	93	2.35	0.75		
きょうだいの有無	あり	237	2.41	0.69	1.88	303 <sup>†</sup>
	なし	68	2.59	0.76		
年上きょうだい有無	あり	176	2.44	0.70	0.05	306
	なし	132	2.45	0.72		
昼間保育者	母親	125	2.35	0.74	-2.36	265 <sup>*</sup>
	保育所	142	2.56	0.67		

† p&lt;.10 \* p&lt;.05

註)平均値は得点が低いほど「テレビ必要意識」が高いことを示す

表2 子育て・家族の状況とテレビ必要意識(1歳6ヵ月児)

		N	Mean	SD	t 値	df
家族形態	核家族	173	2.44	0.76	-3.15	235 <sup>**</sup>
	拡大家族	101	2.71	0.65		
きょうだいの有無	あり	136	2.58	0.74	-0.88	293
	なし	159	2.50	0.77		
年上きょうだい有無	あり	151	2.59	0.72	-1.18	293
	なし	144	2.49	0.78		
昼間保育者	母親	153	2.50	0.79	-0.12	246
	保育所	95	2.52	0.74		

\*\* p&lt;.01

註)平均値は得点が低いほど「テレビ必要意識」が高いことを示す

3歳児では、昼間保育者において専業の母親の方が就業している母親よりもテレビ必要意識が高く ( $t=-2.36, df=265, p<.05$ )、きょうだいがいない方が、きょうだいがいる家庭よりもテレビ必要意識を高くする傾向が見られた ( $t=1.88, df=303, p<.10$ )。また、1歳6ヵ月児では、拡大家族の母親よりも、核家族の母親の方がよりテレビを必要と認識していることが示されている ( $t=-3.15, df=235, p<.01$ )。

#### <テレビ必要意識と日常育児場面でのテレビ・ビデオの利用>

最後に、各々の育児の対処場面において、「テレビ」「ビデオ」を選択しているかどうかとテレビ必要意識との関連を検討した。その結果(表3)、3歳児では、「寝つき」の際の「テレビ」以外、有意かもしくは有意な傾向を示した。また、1歳6ヵ月児においては、「目覚め」の際の「テレビ」と「ビデオ」、「寝つき」の際の「ビデオ」、「泣き」の際の「ビデオ」に有意な値が得られた。概して、3歳児では今回の調査において「困難」と設定された場面で、「テレビ」や「ビデオ」を活用する保護者ほど、テレビを必要であると認識する傾向にあり、1歳6ヵ月児においては、目覚めの際の「テレビ」「ビデオ」や「寝つき」「泣き」場面において「ビデオ」を活用する保護者ほど、テレビが必要であると認識する傾向があるといえる。

表3 テレビ・ビデオの利用状況とテレビ必要意識

	3歳児		1歳6か月児	
	$r_b$		$r_b$	
Q1(目覚め) f.テレビ	-0.10	+	-0.25	***
Q1(目覚め) g.ビデオ	-0.15	**	-0.12	*
Q11(寝つき) h.テレビ	-0.08		-0.01	
Q11(寝つき) i.ビデオ	-0.18	**	-0.14	*
Q14(おむつ) f.テレビ	-		-0.03	
Q14(おむつ) g.ビデオ	-		-0.09	
Q14(ぐずり) f.テレビ	-0.21	***	-	
Q14(ぐずり) g.ビデオ	-0.19	***	-	
Q15(泣き) f.テレビ	-0.21	***	-0.09	
Q15(泣き) g.ビデオ	-0.18	***	-0.19	***
	n	307	295	

† p<.10 \* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

註) Q14は、1歳6ヶ月児が「オムツを換える時」、3歳児が「ぐずったとき」であり、項目が異なっている。

## 【考察】

本報では、3歳児、1歳6ヶ月児を持つ母親の「子育てにテレビが必要である」という認識を中心に、子どもの発達状況やテレビ視聴時間、または家族状況や育児場面でのテレビ・ビデオの活用状況とのかかわりを検討してきた。

まず、目的1にかかわる結果をまとめると図11のようになる。なお、図11において破線で示されている「子どもの発達状況」と「保護者の子育ての楽しさ」との関連については、江原ほか(2003)と小枝ほか(2003)において1歳6ヶ月児、3歳児それぞれ有意な関連が見られていることが確かめられているものである。そのことを踏まえると、1歳6ヶ月児では、いずれの変数間も弱いながらも有意か、有意な傾向の相関を示しており、子どもの発達状況も含めて、親子の相互交渉の中でつくられてきたものであるといえるだろう。すなわち、子育てを楽しくないという母親の思いと、子どもの発達の遅れという、(いずれが原因かはともかく)相互の関連の中に、子どものテレビ視聴時間と母親のテレビ必要意識が位置づけられるのであろう。一方で、3歳児では、子どもの発達状況と子どものテレビ視聴時間、母親のテレビ必要意識との間には有意な関連が見られず、母親の子育ての楽しさを含めた3変数で相互に関連しているのみであった。このことは、ひとつに子どもの発達の遅れはテレビ視聴時間によるものではないこと、もしくは、発達に遅れの見られない子どもであっても3歳になる頃にはテレビ視聴時間が長くなることなどが考えられるが、いずれにせよ、テレビの視聴時間が子どもの発達を遅らせるという単純な因果関係は想定できないことを意味していると思われる。子どもの発達にはテレビという単一の要因で規定されるのではなく、外遊びや絵本読みといった変数とも共変する中で進行するものである。

さらに、1歳6ヶ月児と3歳児とを比較してみると、子どもの視聴時間と、母親のテレビ必要意識および子育ての楽しさとの相関係数は1歳6ヶ月児の方が大きく、逆に、子育ての楽しさとテレビの必要意識との関連は3歳児の方が高い値を示している。特に、1歳6ヶ月児においては子育ての楽しさとテレビ必要意識との関連は有意ではあるものの、 $r=-.10$ という極めて弱いものであるこ

とを踏まえると、1歳6ヵ月児においては母親側の要因を発端としているというよりも、テレビをよく見る子ども側の問題ではないかとも考えられる。

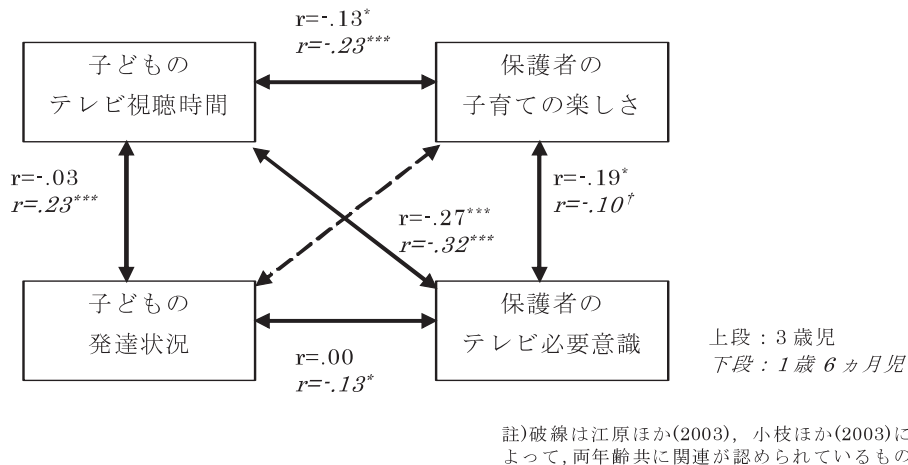


図11 テレビ必要意識と関連要因(順位相関係数)

目的2では、保護者のテレビ必要意識に関連する要因として、「家族形態」「きょうだいの有無」「昼間の保育者」を取り上げた。その結果、1歳6ヵ月児では拡大家族よりも核家族の母親の方がテレビを必要と感じていること、また、3歳児においては日中保育者が母親の方がテレビを必要と認識していること、きょうだいがいることがテレビを必要と感じることと関連することが示されていた。ここでは、1歳6ヵ月児と3歳児それぞれについて、テレビ必要意識に関連する要因が異なるものであったことに着目したい。1歳6ヵ月児では、核家族の方が、比較的テレビが必要であると認識されていることは、まさにこの発達段階において、子どもの側において安全を図る存在が必要であることを意味しているのではないだろうか。すなわち、1歳6ヵ月児では、核家族の方が夕食の支度などで手が離せないときに、テレビやビデオを活用する頻度が高いことに見られるように(田丸, 2006)、人手が足りないときの代替としてテレビを活用しているのではないかと考えられるのである。一方、3歳児では家族形態によるテレビ必要意識に差は見られず、昼間保育者やきょうだいの有無で差が見られていた。きょうだいの有無については、年上きょうだいの有無については差が見られず、きょうだい全体の有無において差が見られていたことから、対象となった3歳児に弟妹がいる場合にテレビが必要との意識が高いのではないかと推察される。このことは、先述の1歳6ヵ月において核家族においてはテレビが子どもの注意をひきつける役割を担っていることと同様の状況を示唆するのではないだろうか。また、昼間保育者による違いは、日中子どもとかかわる母親の方が、子どもに起因するストレスが高いこと(牧野, 1983)と併せて、3歳児という自己主張の激しい発達段階の子どもに対し、テレビというメディアを活用しながら子どもの気持ちの切り替えや、かかわりをしているのではないかと考えられる。

目的3では、日常的な育児場面におけるテレビなどの利用とテレビ必要意識との関連について検討した。その結果、1歳6ヵ月児では目覚めの際の「テレビ」「ビデオ」や「寝つき」「泣き」場面において「ビデオ」を活用する保護者ほど、テレビが必要であると認識する傾向がみられ、3歳児では泣きやぐずりといった「困難」と設定された場面で、「テレビ」や「ビデオ」を活用する母親

ほど、テレビを必要であると認識する傾向がみられていた。これらの結果も、先述のように、1歳6ヵ月児と3歳児との発達過程の質的な差異が背景にあるものと考えられる。1歳6ヵ月児においては、人手が足りないときの代替としてメディアが活用されることが既に示唆されていたが、そればかりではなく、目覚めや寝つきといった生活リズムを整えるためにも利用されており、それが母親のテレビ必要意識を構成しているようである。一方、3歳児では、目覚めや寝つきといった点でもビデオが活用されているが、子どもの泣きやぐずりといった母親にとって手に負えない状況において、テレビやビデオが活用されており、それが母親のテレビ必要意識を構成しているようである。このことも、先に述べたように、3歳児という自我の表れが顕著な時期に、テレビというメディアを用いながら子どもの気持ちの切り替えなどを行っていることを示しているのではないだろうか。

以上、本報告においては、保護者の「テレビ必要認識」を中心に検討を進めてきたが、概して、母親が日常的な子育ての中で、子どもの発達段階に応じ、必要な際にテレビというメディアを上手く活用し、子育てを進めている姿が示されたものと考えられる。

### 【付記】

本稿は、鳥取県からの受託研究「2005年度 鳥取県・メディアと子育て応援事業」（代表田丸敏高）におけるアンケート調査をもとにまとめられたものである。

調査にあたり、鳥取県内の保健所・保健センターのみなさま、鳥取県福祉保健部子ども家庭課、宮内武幸課長、中林宏敬課長補佐、前田陽三次世代育成係長、田中将次世代育成係副主幹、鳥取大学地域学部地域教育学科事務員、福本仁美様にご尽力を賜りました。ここに感謝申し上げます。また、日々の子育てでご多忙の中、アンケート調査にご協力いただきました保護者のみなさまに感謝申し上げますとともに、ご家族のみなさまのご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

### 【文献】

- 江原寛昭・鈴木隆男・平山諭・小枝達也・神崎晋・長田昭夫 2003 この20年間で乳幼児発達はどうに変化したか：1歳6ヵ月児健診から 第50回日本小児保健学会講演集, 266-267.
- 一色伸夫 2006 2歳児のテレビ接触実態とその規定要因の可能性 NHK放送文化研究所 “子どもに良い放送”プロジェクト フォローアップ調査中間報告 第3回調査報告書, 31-44
- 小枝達也・江原寛昭・鈴木隆男・平山諭・神崎晋・長田昭夫 2003 この20年間で乳幼児発達はどうに変化したか：3歳児健診から 第50回日本小児保健学会講演集, 268-269.
- 牧野カツコ 1983 働く母親と育児不安 家庭教育研究所紀要, 4, 67-76.
- 菅原ますみ 2005 乳児期の心身の発達とメディア接触 NHK放送文化研究所 “子どもに良い放送”プロジェクト フォローアップ調査中間報告 第2回調査報告書, 34-49
- 田丸敏高 2006 メディアと子育て 2005年度鳥取県・メディアと子育て応援事業受託研究報告書 鳥取大学地域学部地域教育学科・鳥取大学生涯総合教育センター
- 植木綾子・神谷哲司・小笠原拓・柿内真紀・小枝達也・小林勝年・塩野谷幸・高口明久・寺川志奈子・広重佳治・田丸敏高 2007 メディアと子育て～鳥取県内におけるアンケート調査より～ 鳥取大学生涯総合教育センター研究紀要.3.35- 52

(2007年10月5日受付, 2007年10月15日受理)